

|       |
|-------|
| 911.3 |
| シ     |
|       |

四季奔句標序

此道も、さきに、起るべき時々も  
あつたや。されは、集の撰者、  
思ひまゝの、侍りし。今、既、反、故、辭、  
譲りぬ。一部、の、趣、意、ハ、外、に、  
當、時、の、判、者、  
其、意、を、以、て、稱、内、に、流、行、の、  
餘、光、を、也。  
斯、く、請、好、士、の、ま、り、の、  
分、ら、し、と、を、也、也。



遂平一梓小のはなを亦後の好士も廣く  
世世を思ふもやむつゝあるる表題も  
以て唯四季發句懐とゆえあれを其  
ちめめ書つけ侍りぬ。

徐水



四季發句簿自叙

今也右文之代四民浴太  
平之化。則風雅之樂真之  
一樂也。得此樂乃詠風雅  
之趣。而自壽矣。一身之亡  
歸之。造化而不足論焉。一  
言之名句傳百歲。而其人

則不亡也。所謂得千歲之  
壽者非耶。古人云文不朽  
之業也。宜哉。此言也。近世  
有芭蕉翁者。唱俳諧之一  
道。而鳴于世。一言之名句  
以易感人。吟其句。則直如  
對翁。後人學此道者。不到

折腰而食。三斛之茶飯。即  
言之。祿在其中。亦不誣哉。  
不架高堂。而坐華屋之筵。  
交高貴之諸君。一時之樂  
也。夫子曲肱為枕之樂。亦  
在其中。當此之時。不知作  
何句也。尚書五福。契經七

福何求<sub>二</sub>之<sub>一</sub>外<sub>二</sub>哉。太平之樂  
存<sub>二</sub>此<sub>一</sub>一簿<sub>一</sub>之中。可歌可舞  
嗚呼序。

東武侏子 反故齋



我園如不思議亭不斷櫻可那

四季發句牒上

順到來

川名小巳う文見糸栞<sub>一</sub>の柳  
園庭とハそとそはうぬ分<sub>一</sub>の柳  
秋事ぬと月名<sub>一</sub>の<sub>一</sub>羅<sub>一</sub>の<sub>一</sub>  
糸掛名<sub>一</sub>行<sub>一</sub>為<sub>一</sub>ハ重<sub>一</sub>き時<sub>一</sub>あ<sub>一</sub>カ<sub>一</sub>カ<sub>一</sub>

月之菴

疎影

石臺千鶴のぬねや難まらじ  
糸流の山色を所縁や夢子苑  
在るは菊守の秋去る女郎苑  
月かよふよふのぬねを高切の  
寒食の幾日昔も深山に在る  
橋涼——高れ高れと吹あそぶ  
蚊の麻ぬねの麻ぬねと成るは雪  
あの道よと花なきはと時毎の舟

女

桐君

沾岬

月毛出く思ふ花を待つを花の花  
 怖しや清き水のめく夏の滝  
 葉山子くは毛百おれ葉と星  
 芭蕉忌や鳴ぬ鳥をう炭灰俵  
 〇  
 ぢりおほとくうぬ毒れ多柄が  
 捲上り水の簾や石の花葉  
 武彦時を虫の音定しはの月  
 入桐中散る花もふくみ毛

龜城

女

桐君

石臺中散るぬ花や離まろ  
 春流端の毛を所縁や葉子花  
 左邊れ菊守や秋たる女郎花  
 月かともふくみぬを高切草  
 〇  
 寒食子幾日言ふ深山左九段  
 橋涼しや花を振と吹きあは  
 蚊小麻ぬ葉力小麻ぬ所と伏し草  
 ありまよと花をききと時あう花

沾岬

遠山に霞の伴ふ芥子音  
涼しきや祿直の眠み新出と  
かゆふ事一浴衣に漂ふ羅の如  
町に降る夜多き晴る片時雨  
去年今春の振分紫花梯切分  
舞妓も門田に咲く早苗時  
銀漢あもるともなれぬ白琴  
傘は幾度か蒼むしとれぬ

素人

女

翠旭

草明亭

露仙

白奥小篝火の塵も風情分  
滞居と川を遊星や船添え  
東をとり川を流しとる紅葉か  
幸高もあや光陰の所を重  
藤を揺る風をよみぬ毒花  
まよろくした日も赤き果さ切を  
望まぬ家を拂ふく竹杖を  
笛の葉は枯る毛のとの樹に如

下総佐倉

甜雪



下総佐倉

南枝

○ 庭下修む貝子脊と乾と汐下か

志とれもさふきさめ竹志志あえが

あきよ休まぬ岸津の鳴子かか

葦つくりぬ木もよけや冬玉梅

○ 千住

榮督

常中一前しそめし紫花かまえ

本法くさく涼しく夏は雲

野雨の一畑雲し若葉のよか

蝶々か長生見せ紫屏一苑

○ 稗月齋

果英

紅脂独口の瓶中咲きり姫蹴踊

雨さめと亭毛津なほほくま

扇の羽お空を掃せ今も此月

芝蔴や濡ぬぬある木葉う那

○ 方月菴

楳路

春雨や濡つく井筒猫もゑ

お月あやきも葉さく柏賣

葦や寝をかかぬ鳴る鐘

湯を瀧や雲の念や尾の扇

春部

山嵐千帆麻さそりしつ梅うね

葛窗 其盛

本海崎や室毛紗子蒼まほと

陽向樓 みる称

霧津の滝もけあぬ夜う車

世外菴 茶香

庭下踏の裏すそ日阿を梅花

坂戸 窓雪

妻おとす千氣をがまする梅ざ

仙星

吹きては鳥形あかしく揺う子

葉巴

沖千帆の入り日憶せし人丸忘

沾峨

風並そえへあそび一日炎

日光 十兄

水舟水瀬を計り鳴く蛙が

十住 三橋

世々藤の波船よりそが卦が

全 撫里

織屋れ夕日を病の柳うね

眠雅

毒をらん子きこらせ給く高思忘

孟魚

八重といふ咲着持き伝度が

六花菴 琴峨

いささよう雨日の暮をら情う車

下総佐倉 梧風

夏部

陸の声 箒へ遠にやとく記す

池端

兒秀

白る虫 又志をこすも若さゆが

文淵

風毛 赤をとりかきと書つて用す

桔風

赤ふ堂 己に柳をそりしむ

二三菴

松亭

鳴るおと木魚へ 海と水鶴も

茶香

空を飛ぶ鳥はの 伴志 若さか

猪徳

強食 千松 英姫の 情さうね

京橋

浅川

曉を 眩に 夜を 志願する

雅景

子規 返す 志を 葉に 似しる 鳥

英之

ふ元 ます 風の 志を 田植が

梅枝

まき 舟に 柳を 横たえ 月を 照

沾岬

釣を 舟に 蚊の 夢も 照し 木曾の 柳

浅川

葉の 動く 山を 涼し 暮る 麓

梅枝

秋部

極至一唱と刈込む稻穂くふ

兒秀

名月や入相の陸中兼と咲

敬和

菊咲く今年樽の匂ひかな

谷水

摘中を貴子のぬき花押ふ

仙里

向のよい處を馳まてふの月

可長

初丁下まの帷子も中世いろ

渭川

礎もも秋の長きころの白き雪

浅川

室きふ垣根の風や程やて登

梅枝

薄やと細き雪をなや後のより

孟魚

冬の棠は埃やあや秋も風

箕北

白露の初は履きける芙蓉の如

沾岷

木の筒と棠の葉は月々秋の

梧風

冬部

凍はく葉もまきあひやふ花

梧風

かろくを旭もまほしき原

眠雅

門の香おと訪ふ人をたぐもぬ

沾岷

蕉下菴

加金城

極至し唄を刈込む稻穂うら

兒秀

名月や入相の蔭に葉を咲

蕉下菴

敬和

菊咲く今年樽の匂ひかな

谷水

摘州を幾多のぬき花押さふ

仙里

向のよい處を眺まてふの月

可長

初下下まの帷子も中世いろ

渭川

礎もも秋の長きころのさき

浅川

室きふ垣根の風や程やて登

梅枝

薄やと細き空をなや後のより

孟魚

冬の棠は埃にやるや秋も風

加金城

箕北

白露の初は厚きる芙蓉の如

沾岷

木の筒と棠の葉をる月此多秋

梧風

冬部

凍はく葉もまきあひやふ花

梧風

かろくを旭もまきあひやふ

眠雅

門の香いと訪ふ人をたぐもる

沾岷



おのり 海を春を 洗はるる 水加木を

さきり 出と弓をり月を かくて 鏡

菊咲や 肌をたぬと 明をさし

子目魚の 煮とる電を 付ぬり 柳

習りりや ぼろ藝子 屏を 尸

行ゆく 舟をなす 舟をり 田菜 雨

教まは 教へる 形の 葉止子 舟

象もよ 海を 行はるる 舟

波丸

江戸  
梅枝

登舟

風をれー 目れ及く 舟山をり

水晶の 湯子と 舟をさし 舟

郎よよの 袴や 袴をん 舟をり 月

濡乾く けー きれぬの 舟をり 舟

折る 羊紙 舟をり 舟をり 舟

火を 見せて 舟をり 舟をり 舟

菟柳子 舟をり 舟をり 舟をり 舟

吾也く 舟の 舟をり 舟をり 舟

拵石

里足

晴まゝの奥歯く啼くや春の雨  
一雨多き夢の葉を傳はるきん  
若月一葉かく影を斬のつま  
みかえぬ雲の原白く夕潮のあ  
①  
千早振かき離て女男はさくら  
流るはと流のやうさよ雲空  
常うらた野かりの宿と月見り  
一陽のかつこちを度や冬全毒

三光堂

曳塗坊

亀貝

梅笑ふ春の水ゆく 亀貝

夫口の社と詠ふ

内陣のすけはよし 夏木立  
よのちや裸も強を角力が  
ちのちらや渚へはく陸の雪

亀江

梅の香も帯の軽きまきり  
あゝのち蓮の香や東雲  
曉々浮橋より縁へさくら  
さくらを千の糸のま向や鉢扣

上廿



讀列  
白駒堂

卅刈を造り蝶や日さす藤  
龜岳

きみよしの果はさる茶虎々雨

蚊の背も尾花よりぬ後の月

安枝とるまへま少かり

管人をも苦きるるをては見え

ゆぬぬを今も待て部云

旅のみまると結をうたはる

曙の清路定ふふるわ

全

淇竹

全

奈美

柳が風を吹やうぬる

又りりー世界へおおぬ

傾城のうまはりけ放生會

毒も灯をとりて年と守あ

東青甫

竹苞

日本の人鼻をー山はた

風も仕揚尺とまけま

のさかく麻能きと結の

途くまのゆきも指

東明

毒やとけ流る枝かー龍の尻  
あまきりや降るあまーと深ふか  
空を舞ーと雲の影さるや雲の目  
心焼くく水丁町とあるまゝを電

玉花樓

東曉

雉啼くやまこ此山を昔ゆらん  
あまかーは元のやうく星や沙粒川  
あまを流す流る欲あま今午酒  
風や一處も霧も皆むーし

隨流亭

石龍

夢表ぎた凡見をや柳の影  
浪りしき楫あーくやらんこを  
八朝や舟を毒の白かき  
指も目を追うまをくやを牡丹

果然

あけやう売った紙の袖をちや  
鉄砲の煙とまやあまをわす  
丁切のや腰をかこちーんを  
神をアをい子あまを所の上端

○ 晴月の糸より

つめきつたを解けても細の園より

菊根より

空の香ハゆらすや雲のほくま

若手初きぬ蔓痕志あす葉山子

杉千階る香終柱の膝より

初まきや初より一歩凡中此系

元船子葉梧のきや一歩月毎

きし入る目毛若みあり菊の宿

雲守の火をきくあうう樹より

輝雄

徐水

追加

○ 四季混交

たみあしはるを去た志麻より

筆中齋

川社

葛蒲さた其ま伸ふてお月雨

鼠山

白雲よ並ねて花も白くふ

下総佐倉

東葦

ふくろ園は合点の鶴舟切由

米艸

若月やぬきと晒と浪も花

雪紅

風や入江の曇り晴よら

全

淡き雨の音

下総佐倉

仔肩

山をよぎる小童の音

全

銀沙

雪の音

全

雪紅

茂林の音

全

鯉洞

涼風の音

全

茂林

白雨の音

保品

青亀

暮の音

全

秋露

空の音

全

峻嶺

花の音

五遊

春の音

甜雪

龍吟扇以角

○其角座

荒小田日暮里浄光寺水せき入まきく啼々

湖十

雷葵花亭の月見おまけくつりつらみぬのちりあれ

名月や雲あつたあ共むくら

石むらり濤あつたあ共むくら

粉せぬあつたあ共むくら

一漢

涼くあつたあ共むくら

甲斐ぬあつたあ共むくら

佐保ぬあつたあ共むくら

山あつたあ共むくら

晋阿

蜀魂あつたあ共むくら

草あつたあ共むくら

香あつたあ共むくら

教あつたあ共むくら

長隱

衣あつたあ共むくら

桐あつたあ共むくら

若あつたあ共むくら

清くぬくは 漢方 山嶽

万英

あ袖の肩へあくるぬあ門さか南

初秋やまきさく書よれお射とと

意あさくさくく袖を枯せや

芝罘を掛のた子たも似く 朧月

晋如

白雨やあつ川ふくた石の上

牽やあ舟の名もあはる 約途

とまわくくさても遠く香の川

聲へあけ眼よ花鳥あはる 見貴達

純逸

涼し山や岸よ水馬あはる 見あはる

初秋よさくたあもあや二夜月

蔵玉よ空仁王へ涙を流葉が

あよ香中よ清くものや花の兄

花千

其車陣よ山をえてあはるあはる

名月や折く酌のさくさく

あはるや波あはる 見あはる 海

峯はくしを流すかき山嶺

戀箱

縁喰ふと命ハ怖し初松臭

晩鐘で枯木かきし原をかくら

下戸のふり氷砂糖のまはうも

滝川や岩子はまわく岩枯

秦川

子規中よ二あう二子山

麻の香や四十よ号ぬんを誰

物喜むとかきえそ老の夕へく都

辺りく子松ハ香もあ山さかた

秋色

初しそ男色ハ石やう苔れ花

婿ハ山平川もあお流星の意

うしく色恋ハ入客で初時あ

春柳を少辛行鞭千折しう堤ハか

寶井

筆でわしと寺子れをてん

夜月遠月並ハ化しう灘切南

初若く官女子仰せ一はまみ

白魚をとりく振ふ男より  
所なきる樹をさつくとてふが  
静さよ天地よあまの月の影  
志くきくくさかきさのたより  
○平砂側  
忘るれハ猫も困へるのりも紫  
ぬらりの遠涼くまも陰くれ  
霧るすのぬえハ静ぬ柳や白  
狐狸さくををえとと薬喰ひ

春雨やををををはきのあま  
山かハハ流るるりー半晒  
箒目ふ萩も修若きく夕な  
水仙やあゝの形も六の角  
鏡もく一輪流ぬ花さかり  
枕さくぬ鳥屋の耳や郭公  
後の力今ををを三井も片麻  
葱既よ毒やよりの室さかむ



はまきそののまきあのみみ入る  
浅州と信子おきて時を待

かゝるまの田原や星ふやととと

閑さや磯の縁千 蠅もか

萩咲や中も落けき古禿舎

風やとけく目もく仁王門

○乾什門

井の蓋子柿一筋くくえき赤紫

牡丹も花の芝居好くものぢり

月今宵日の影ぞく反照く先

志ひす諸事とあはれき心流澄

貞風

來爾

為其老の嘘なるらん其薄

牛吞

牡丹を穴穿しんとまれば白

初丁の幽ふ北斗此光の舟

初更や芳野く飛妙毎の星

庭出づ斯に新お田螺る

そ教ちと血平かくし佐公太

はふまその菊あゆみ麻入らる

浅中と信ふ初きて時を待

羽貫

お一巻の田原や星ふやととと

貞風

困きや礎の縁千 燧の教

萩咲や中を流けき古先倉

風やまけく同くく仁王門

○乾什門

井の蓋を柳一筋くるとえ赤紫

來爾

牡丹を先の花居好くものなり

月今宵口の影をく反照く先

念ひす諸をよとあゆむ心流澄

奇麗如ハ内々の事よ潮干狩

梅也昔々詠一むくは香

喜ハ遠くハ淋しハ為る唐の邦

武藝地々也や月よは秋のし

あゝ風き風子吹散る胡蝶也

旅人のこゝろも更なる夜の中

露をや眼も僻射し旅衣を

神楽の音流ちき葉山子か事

寸松

季大



